

# 裏中華街の家

-横浜中華街のための公共空間-



ここに住む華僑とその子供たち

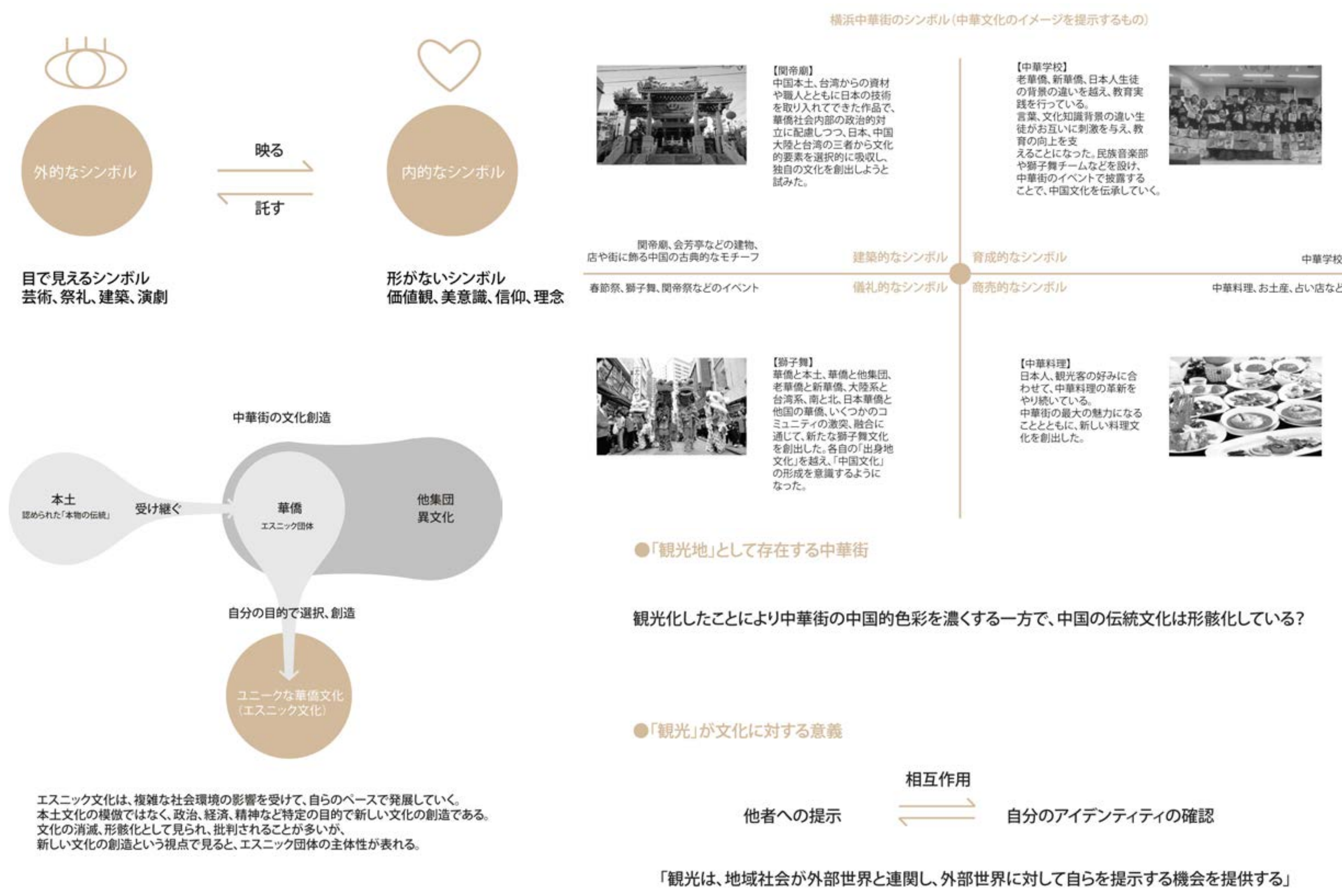
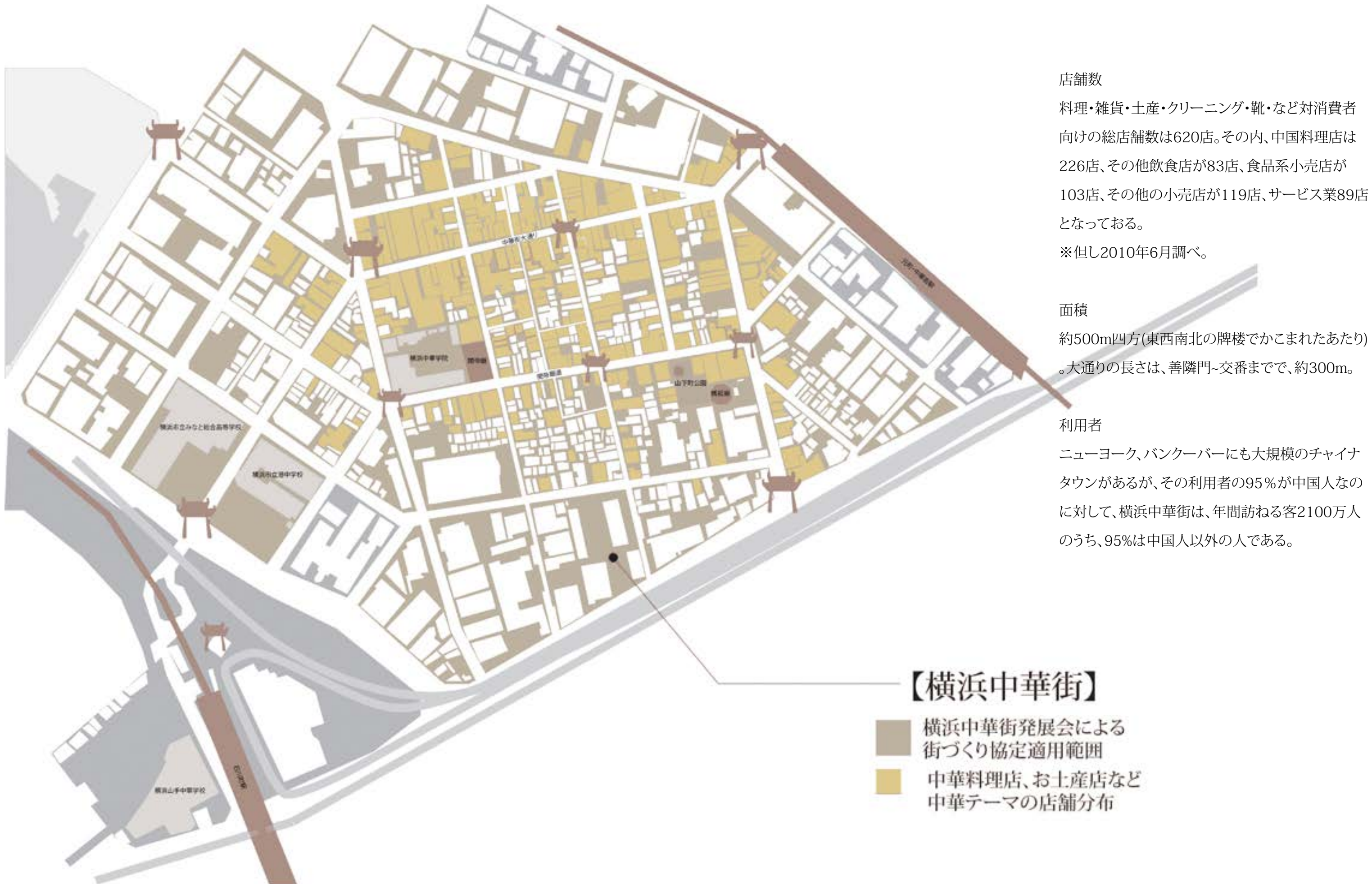
ここに訪れるお客さん

現在、横浜中華街というと、多くの人が「飲食店街」というイメージしか持っておらず、横浜の観光地の一つとして捉えている。しかし、テーマパーク観光地ではなく、横浜開港以来、多くの苦難を乗り越えてきた華僑・華人が自分のアイデンティティをしっかりと根に据えて創り上げた街であり、生活の場であり、共同社会である。何世代にもわたった華僑の人々が、自分の生活を営み続けるため、社会、経済の変化に対応し、中国本土でもない、日本でもないユニークな「中華街文化」を創出した。しかし、エスニック観光スポットとして発展していく中華街の主役となる華僑社会が、徐々に三代目・四代目華僑を中心とする構成になっていくにつれ、中国人としての意識が薄くなったり、日本社会に同化し、中華街を離れて行く人が増加している。また、近年では留学・就労で日本に来た中国人は、中華街を観光地として捉え、無関心な人がほとんどである。それに対して、中華街に育った二世・三世の華僑は、中華街を自分のふるさととして見られ、若い世代の華僑を中華街に呼び戻し、伝統文化への関心を呼びおこすことを工夫している。

このような背景のもと、本研究では中華街の商業、行事と華僑文化発展の関係を研究した上で、若い世代の華僑・華人を中華街の街づくり・文化イベントに参加させる仕組みを提案し、そのための公共空間を設計することにより、商業発展と文化伝承が両立できる環境を作ることを目的としている。







歴史

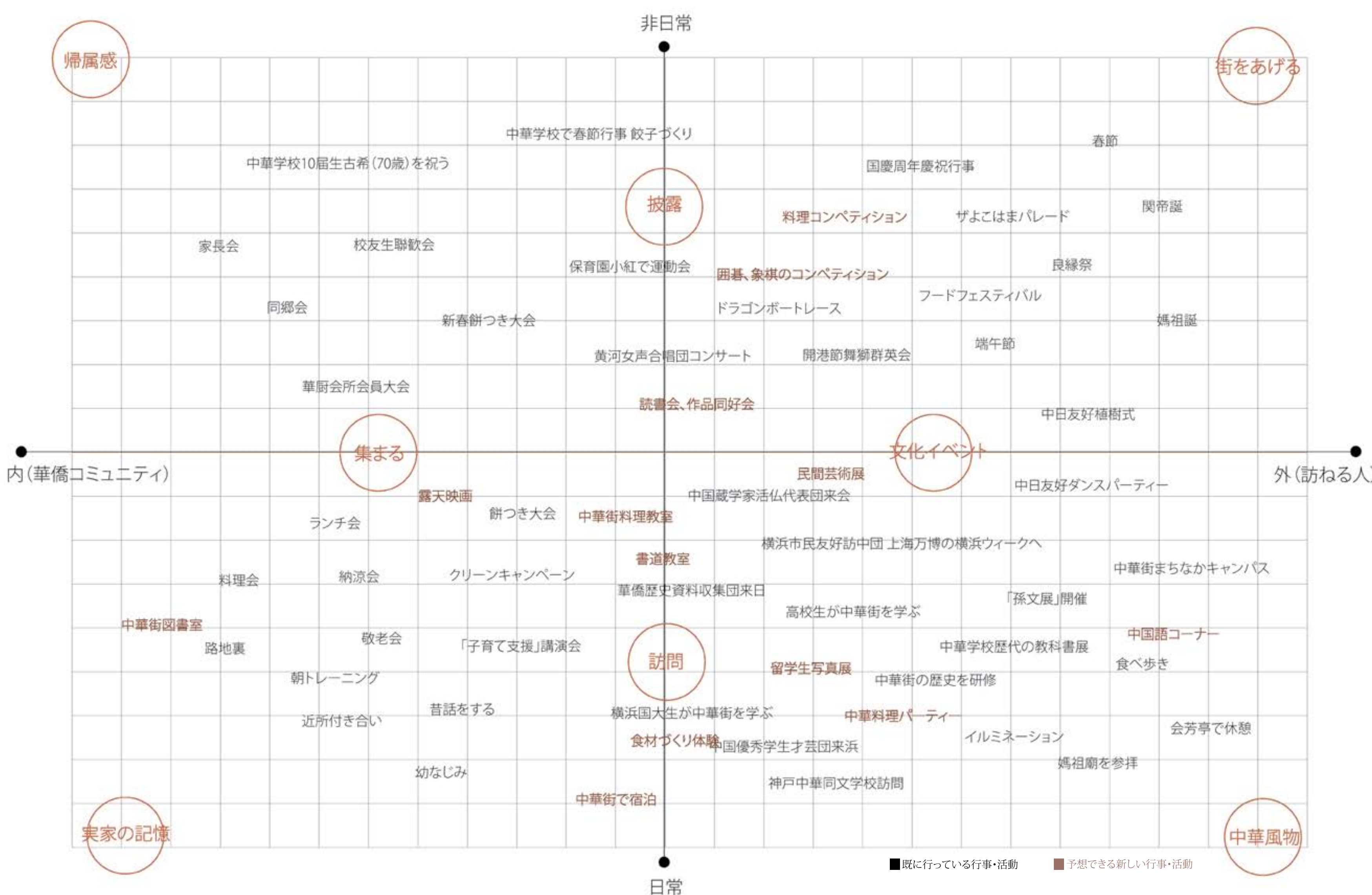
観光地として賑わう街

華僑文化

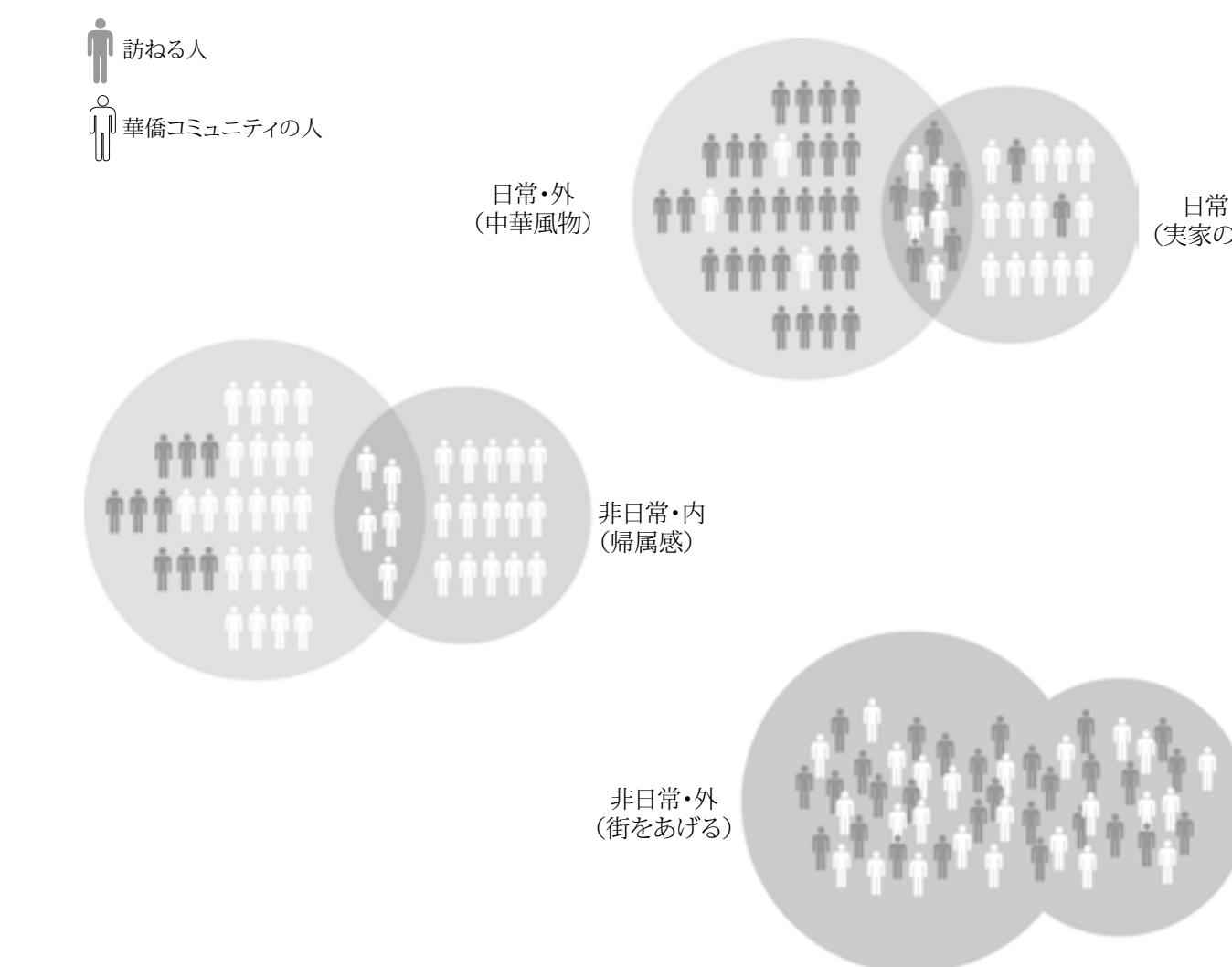
イベント、行事

裏中華街の家 デザインコンセプト

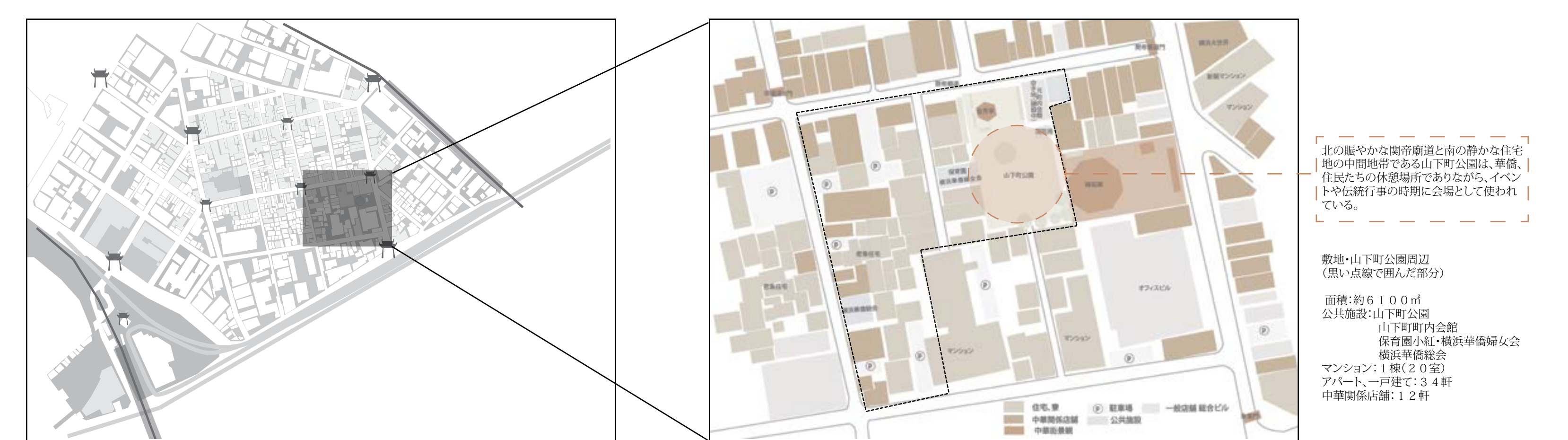
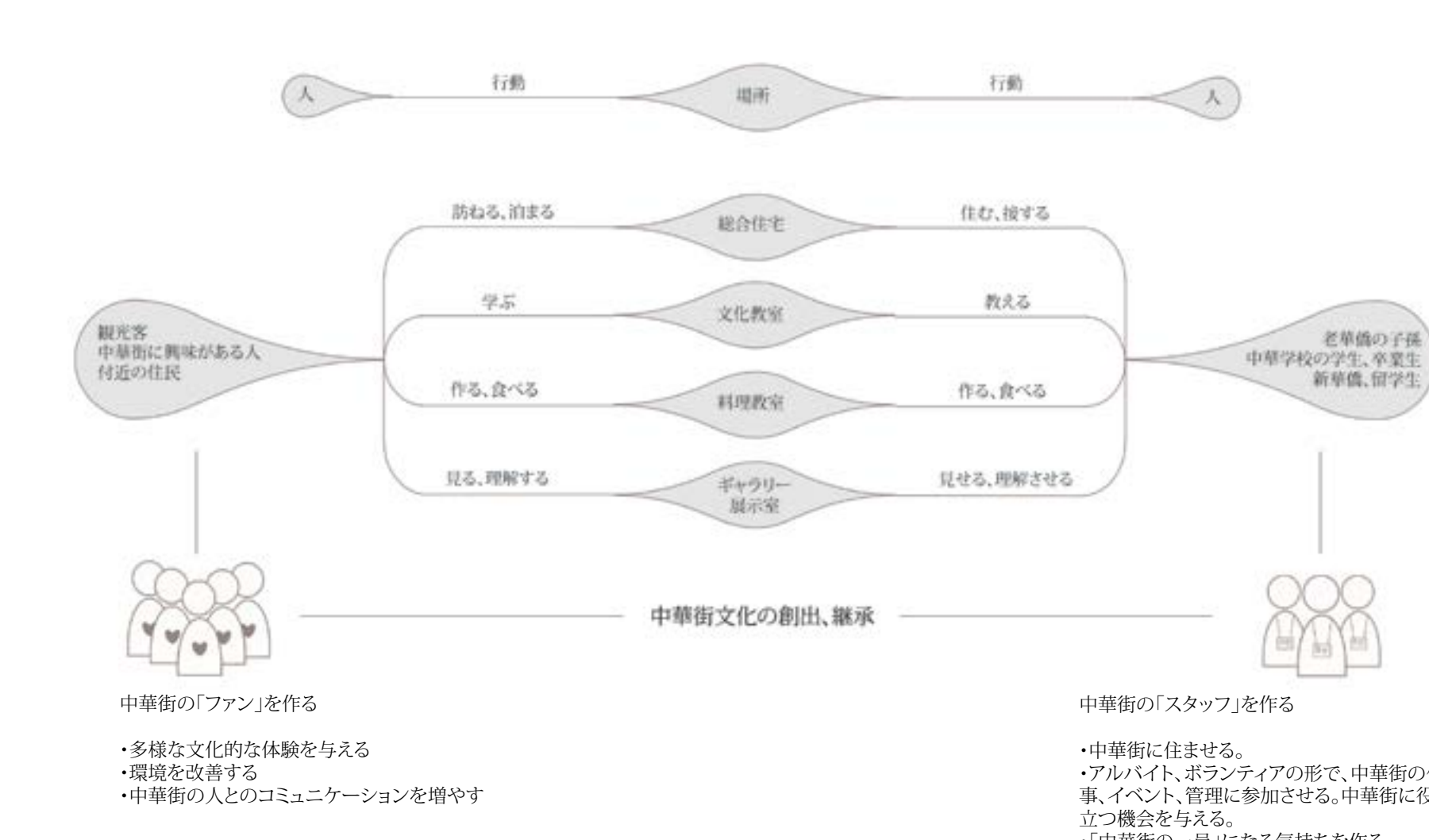
敷地分析



● シーンによって、空間の機能が変わる



● 場所を通じて、人を繋げる



- 東側の11階建てのマンスンの影響で、密集住宅地に目差しが入らない。
- 使われていない古い住宅がたくさんある。
- 周辺に立体駐車場があるので、地面駐車場の利用率が低い。
- 広場の環境整備が不足。
- ショーがある時、観客のスペースが足りない。
- 華僑施設が4つ(3棟)あるが、用事がない時に使われないことが多い。
- 階段華僑が集まる場所がない。



